

平氏隆盛の頃の腰刀と轡こしがたな くつわ

奈良市西大寺南町（腰刀） 杏町・法連町（轡）

2011年度に保存処理を行った腰刀2本と同じ頃に使われていた轡（馬具の一つ）を紹介します。いずれも武家政治へ移行していく平安時代後期の12世紀頃の資料です。

1. 腰刀（写真・第1図）

平安時代の終わり頃になると、成人男性は腰刀を身につけるようになっていました。合戦用の長い刀（太刀）と異なり、日常生活に必要な万能利器として常に腰に差していた短い刀が腰刀です。

西大寺旧境内第23次調査（西大寺南町）の土坑墓内から中国産の青磁碗・皿と共に出土した鉄刀2本は12世紀後半のもので、黒漆塗りの柄と鞘を装着した大小の腰刀です（写真-1・2）。

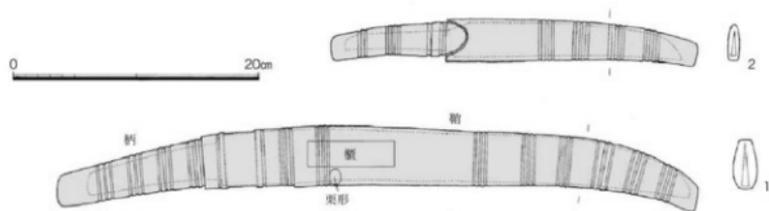
大形の腰刀（写真-1）は、柄の縁が鞘口の中

に収まる呑口式のみぐちです。鞘の表裏に方形の凹みくぼ（横）があり、組みひも（下緒）を通すための突起くりぼた（栗形）も片面に見られます。3条の沈線しんせんを一つの単位とする装飾が柄と鞘に刻まれています。刀身は、刃長37.9cm・茎11.1cm・刃幅4.3cmで、1.3cmの反りが認められます。

一方、小形の腰刀（写真-2）は柄の縁がU字形に丸くつくられ、鞘口にはその形状に合わせた半円形の削りがあります。呑口式ですが、合わせ口は半円形となります。大形の腰刀と同様に3条の沈線しんせんを一つの単位とする装飾が柄と鞘に刻まれているものとみられます。刀身は、刃長18.4cm・茎8.8cm・刃幅2.8cmで、反りはみとめられません。



奈良市出土の腰刀と轡



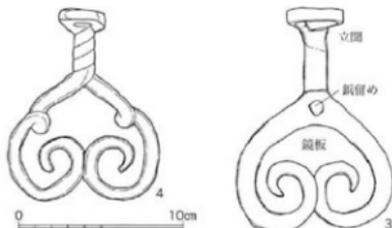
第1図 轡の復元図(1/4)

これらと柄・轡の装飾がよく似た腰刀が三重県雲出島貫遺跡の木棺墓から出土しており、12世紀末から13世紀初頭頃に埋葬された伊勢平氏に関わる人物の墓の副葬品とみられています。また、ここでも西大寺旧境内の土坑墓と同じように中国からの輸入磁器が出土しています。これらの輸入磁器は、その頃に平氏が推進した日宋貿易で我が国へ多量にもたらされたものです。

2. 轡(写真・第2図)

轡は馬を制御するのに必要な器具で、頭部に固定するための帯(面懸)を結ぶ輪(立間)が付く2枚の鏡板・馬がくわえる銜・手綱を結ぶ引手で構成されています。平安時代後期の轡の出土例は少なく、極めて貴重です。

合戦が頻発する12世紀後半に使用されていたのが平城京第157次調査(法蓮町)の井戸から出土した轡(写真・第2図-3)です。厚さ0.3cmの鉄板を逆ハート形の輪郭に切り抜いて鏡板をつくり、立間を銜留めするのが特徴です。その形が杏葉に似ているので、杏葉轡と呼ばれています。鏡板の大きさは、立間を含めた長さ13.8cm・幅9.6cmです。銜は2連式で長さ17.9cm、引手は失われています。



第2図 つくり方が違う二つの鏡板(1/3)

一方、平城京第484次調査(杏町)の井戸から出土した轡(写真-4・5)はそれより少し古い11世紀後半の資料です。全体が残る鏡板(写真・第2図-4)は径0.8cm前後の2本の鉄棒を逆ハート形にねじり曲げてつくられています。立間を含めた長さ11.8cm・幅9.3cmです。2連式の銜と引手の一部が錆着いています。銜の長さは17.25cmに復元できます。それと共に出土した鏡板(写真-5)は一部を欠いていますが、幅1.1cm・厚さ0.4cmの細長い鉄板の上下を縦方向に切り開き鍛造して鏡板と立間をつくっているようです。大きさは立間を含めた長さ10cm前後・幅7.6cmで、先述の鏡板よりも一回り小さくなっています。つくりや大きさが違う鏡板を組み合わせて一つの轡を構成していたようです。

時期の異なる二つの轡を比べてみると、鏡板のつくり方に大きな違いが認められます。立間までを一体で鍛造してつくる轡(4・5)が古くからあり、鉄板を切り抜いてつくった鏡板に立間を銜留めする轡(3)が12世紀になって新しくあらわれることがわかります。

杏葉轡は絵巻物の合戦場面に少なからず描かれていますので、軍馬用に使われていたと考えてよいでしょう。頻発する合戦に備えて多くの軍馬を確保するためには、馬具の量産が必要となります。轡(3)はつくり方が簡略化されていて、量産に適した特徴が見てとれます。また、同時代の装飾豊かな轡とも関連し、形の異なる鏡板に取り換えて立間を銜留めするだけで別型式の轡をつくることができます。多様な轡を規格化することによって、武家政治へと移行していく12世紀後半にこうした馬具が量産されていったとみられます。